

わずか5年で つかんだ〝五輪キップ〟

元スノーボード日本代表

はしもと みちよ
橋本 通代さん
(47歳)

「世界で通用する選手になる！」。24歳でスノーボードを始め、世界の舞台へかけ上がった寝屋川市出身の橋本通代さん。2002年のソルトレイク冬季五輪に出場し、「ここに來ることができたのは、ふるさとの皆さんのおかげ」と感謝を忘れません。

「有名になって五輪に」 スノーボーで世界めざす

小さい頃は体育が大の苦手でした。自称「文系女子」がスポーツに目覚めたのは、四天王寺国際仏教大学1年生のとき。友人に誘われたスキーのモーグルに熱中したといいます。

その頃、世間は就職氷河期でした。卒業後の進路に悩みましたが「スキーで有名になろう」と単身カナダのウィスラーへ。スキーが盛んな地でしたが、ホームステイ先は日本人のスノーボード一家。「誘われて滑ったら簡単にジャンプができ、3日後にはボーダーになっていました」。

そのとき、すでに24歳。時間はありませんでしたが、「エッジの使い方などがスキーと似ていてね。地元のハーフパイプの大会で3週続けて3位入りました」。そして転向3年目でナショナルチーム入りし、1999年開幕のワールドカップ(W杯)参戦にこぎつけたのです。

「寝屋川市から五輪選手を」 転戦費用を市民が支援

ところが各地を転戦する遠征費約200万円の工面が大変でした。しかも全て自己負担。この窮地に救っ

てくれたのが、雪と縁のない寝屋川市の人たちでした。「ミッチャンのために」とボードをかたどったステッカー「写真下」を作り、1枚1000円で協力を呼びかけると、7か月間で150万円が集まりました。

市民の支援で参加したW杯は2大会で表彰台に上がり、世界ランキングも6位に。翌年も連続2位に入り、五輪の代表切符をつかんだのです。

市内の体操教室でも得意のジャンプを磨き、29歳で臨んだソルトレイク五輪のハーフパイプ。「コンディションは最高。決勝に進みましたが、より高く跳びたいという気持ちが強出すすぎた」といい、結果は12位でした。それでも「夢のような大会でした。寝屋川市の皆さんの支援がなければ、W杯の参戦はなく、その次の五輪もありませんでした」。

選手から指導者に

「子どもたちに経験を伝えたい」

五輪後、脊椎を痛めるだけがありました。素晴らしい体験を子どもたちに伝えたいと、宿泊型の教室「キララ キャンプ」を福島県内で



▲通代さん(左)と勇人さん

開設。7年前に長野県軽井沢町に拠点を移し、これまで何人もオリンピックを育ててきました。

人生の転機となったウィスラーで出会い、結婚した全日本スキー連盟コーチの今井勇人さんは言います。「彼女はまず目標ありき。それを実現してしまう、その行動力がすごい」。この言葉に、2児のママは笑顔でうなずいていました。

私とふるさと

3歳のとき、交野市から父親の実家がある寝屋川市に引っ越してきました。市立南小学校に入りましたが、子どもの数がすごく多かったという印象でした。田舎ではないけれど、都会という雰囲気でもなく、そんな中で伸び伸びと楽しく過ごせました。

中学校では、先輩に憧れて入った吹奏楽部もしばらくして退部。中学校、高校とクラブ活動はほとんどせず、早々に下校する「帰宅部」でした。

両親は母の実家のある高知に移住し、寝屋川市を訪れる機会は少なくなりましたが、結婚する35歳まで過ごした街。オリンピック出場とも重なって忘れられないふるさとです。



高々とジャンプする
橋本さん